

ほんばこ



ながつき もみじつき ほぎつき
9月(長月 紅葉月 秋月)

※二十四節気※

はくろ
白露 8日 大気が冷えてきて露を結ぶ頃です。朝夕の涼しさがくっきりと際立ってきます。

しゅうぶん
秋分 23日 春分と同じく昼夜の長さが同じになる日です。これから次第に日が短くなり、秋が深まっていきます。

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2022

9月を迎え、朝や夜の気温がだんだんと下がり、過ごしやすい季節になりました。「読書の秋」とも言われるこの季節に、今まで読んでことのなかったジャンルの本に触れてみるのもいいかもしれませんね。

『オルタネート』 加藤シゲアキ 著 新潮社

私がお勧めしたい本は、加藤シゲアキの『オルタネート』です。この本は、3人の高校生が人間関係に悩みながらも周囲の人や自分とぶつかって成長していく物語です。この物語では「オルタネート」という SNS が鍵となっていて、SNS が普及した現代を生きる私たちが共感できる部分が多くあります。また、自分と考えが違う人と出会ったときにどのように接すればいいのか分からないという、誰もがぶつかる悩みがリアルに描かれており、主人公に自分を投影することができます。今人間関係で悩んでいる人はこの本を読むことで少し心が軽くなるかもしれません。

(2年生 女子)

県立図書館協力図書紹介 (190冊中の一部を紹介) (R4.7~R4.11)

☆期間限定で県立図書館からお借りしている図書です。

図書室入ってすぐ右側にありますので、この機会にぜひ手に取ってみてください。

	書名	著者名		書名	著者名
哲学 ・ 道徳	しらずしらず	レナード・ムロ ディナウ	文学	ピクルスの気持ち	同志社 女子大学
	泣いたあとは、新しい靴をはこう	日本ペンクラブ		顔面漂流記	石井政之
社会 ・ 福祉	“今”からできる!日常防災	永田宏和		七つの顔の漱石	出久根達郎
	あの戦争さえなかったら 上下	藤沼敏子		生きる力	なかにし礼
	高校生のための税金入門	小塚真啓		行儀の悪い人生	マークス寿子
	地方に生きる若者たち	石井まこと他		忘れえぬ声を聴く	黒岩比佐子
	本当の貧困の話をしよう	石井光太		14歳	千原ジュニア
自然 科学 ・ 医療	がれきの中の天使たち	椎名篤子		クロスカウンター	井上尚登
	朽ちていった命	NHK取材班		リバース	石田衣良
	日本列島いきものたちの物語	岩合光昭		小説 ・ その他	青空チルトアウト
	被災者に寄り添う医療	稲光宏子	沈底魚		曾根圭介
地球最後の日のための種子	スーザン・ドウ オーキン	yes	川上健一		
技術	谷間の虚構	高杉晋吾	-お父さんにラブソング-		
	東京スカイツリー物語	松瀬学	夜明けの縁をさ迷う人々		小川洋子
文学	あら、もう102歳	金原まさ子	スナックちどり		よしもとぼなな
	おとな小学生	益田ミリ	鴨川食堂		柏井壽
	こわせない壁はない	鎌田實	限界集落株式会社		黒野伸一
	ためない心の整理術	岸本葉子	真夏の方程式		東野圭吾
			名探偵の証明		市川哲也

高瀬隼子（じゅんこ）『おいしいごはんが食べられますように』 2022年上半期芥川賞

1 高瀬隼子

1988年生まれ、新居浜西高校、立命館大学文学部に学び、会社員をしながら創作活動を行う。2019年『犬の形をしているもの』ですばる文学賞。『おいしいごはんが食べられますように』で2022年上半期芥川賞。中学高校以降では、吉本ばなな、角田光代、いわゆる純文学、エンタメ、島本理生、金原ひとみなどを読んできた。（『文藝春秋』R4、9月号の記事などから）

2 『おいしいごはんが食べられますように』

舞台は、東京近郊の会社の小さなセクション。二谷さんという男と、押尾さんという女が交代で語り手（視点）を務める。焦点になっているのは、芦川さんという女。彼らは会社の同僚で、結婚前の二十代だ。他に、いかにもいそうな支店長（男）、既婚者の藤さん（男）、パートの原田さん（女）、他の女性社員などが出てくる。あまり多くの人が出てこない、狭い職場だが、職場には正規、非正規、既婚、未婚、男性、女性、強い人、弱い人（？）が出てきて、一応多様だ。（他に芦川さんの弟や犬、二谷さんの母、妹、祖母なども出てくる。）

二人の女性、芦川さんと押尾さんは、ほぼ同い年だが、性格が対照的だ。芦川さんは頭痛持ちで何かと早退し、仕事でもミスをする。その分を他の社員が黙って補う。芦川さんは会社では不適應の無能力者に見えるが、料理がうまく、ケーキを作ってきては職場で配り、周囲を味方につけている。周囲は「芦川さんだから仕方ないよね」「今日では、事情があって休む人を攻撃してはいけないよね」という雰囲気だ。加えて、芦川さんは「かわいい」。対して押尾さんは、体育会系的（もとチアリーダー）で、頭痛があっても耐えて余分に仕事をし、かつ攻撃的な性格だ。芦川さんのことが嫌いで、二谷さんと連合して芦川さんを攻撃しようと提案する。

この二人に挟撃される二谷さんは、実は・・・

ここから先はネタバレになるので秘密。読んでみるといいかもしれません。

一つ印象的な所を挙げると、芦川さんが職場でケーキを配り、誰もが儀式のように「まあ、おいしい！」「どうやって作ったの？」などと口裏を合わせる描写が、リアリティがありすぎて、気持ちが悪かった。作者はこういう経験を日常的にしながら、違和感を覚えつつ観察してきたに違いない。職場の中には、実は芦川さんがケーキを配るのが不快で苛立つ者もいた。これが事態を展開させていくのだが、ここから先は読んでのお楽しみ。

『文藝春秋』9月号芥川賞選評によれば、山田詠美「彼女のそら恐ろしさが、これでもか、と描かれる。思わず上手い！ と唸った」松浦寿輝「わたしは背筋がそそけ立つのを感じた。これはほとんど恐怖小説だ」奥泉光「一見は平凡に見えて、本作は野心的な作品」川上弘美「この小説の中の人たちは、生きている」など。批判的な意見もあった。

この夏は山上事件（安倍首相襲撃事件と統一教会問題）があり芥川賞の話題が消し飛んだ感があるが、久しぶりの愛媛県からの芥川賞ということで、新居浜西高あたりでは盛り上がっているようだ。

なお、愛媛県出身で芥川賞受賞は、大江健三郎『飼育』、吉村萬壺『ハリガネムシ』（吉村萬壺は、松山市生まれ、大阪育ち）がいる。高瀬隼子が3人目。